

日本稲の起原について(二)

—南方伝來說批判—

鑄 方 貞 亮

一

本項に於いては、国分直一氏の見解を中心として管見を披瀝する。⁽¹⁾氏は「我が国古代稲作の系統」の冒頭にあたり、次のような多岐にわたる疑問、および、今後、究明しなければならぬ事項等を挙げて居られる。⁽²⁾

日本古代の伝来稲は日本型水稻であること、又その稲作の故郷は華北であること、その伝来経路は華北—朝鮮—北九州のコースをとつたであろうとすることは考古学者側に於ける有力な説になつてゐるよう思われる。

然し私は若干の疑問をもつてゐる。先づ品種については日本型以外に異種異型がなかつたかどうかを検討する必要があると思う。稲作の技術についても従来考えられたことのない南方島嶼型の技術について考えてみる必要があるのではないかと思う。

日本稲の起原について(鑄方)

一

稲作については特に農学者の側から屢々優れた研究が出されているが、筆者は民族学的立場から我が国古代の稲、特にその系統について追究してみたい。そしてその結果が農学者側の研究といかに相関するものをもつかを明かにしてみたい。

はじめに赤米を手がかりとして考察を行つてみたい。赤米が東南アジアに顕著な米であることから注目したのである。

考古学的には古代粳、土器に遺る粳痕の考察はもとよりのこと、遺跡の地理的状況についての検討も必要であると思う。

又伝来説のきめ手に屢々用いられる伴存文化との関連にも注目すべきであると思う。その他稲作技術を東南アジアに遺る原始的な技術との比較に於いて考える必要もあるかと思う。稲作を、従来とかく関心の外におき勝にしてきた南方との関係に於いても考えて見ようとするなら、南方系農耕技術についても注目する必要があるか出てくると思う。

古代稲の問題、特にその系統を考えることになること、きめ手が十分でないために、どうしても文化人類学的な拡がりにまで考察の視野を拡げて考えて見る必要があるように思われるのである。（後略）

このように幅の広い角度から数多くの資料を駆使せられつゝ、最後に「内地型稲作の故郷としては安藤広太郎博士ら農学者による江南説を重視するが、伝来経路としては東南沿岸地方—黄海沿岸、殊に山東半島沿岸の調査は重要であると思つている—から西南鮮に及び、南下して北九州に及んだものであろう」との結論に到達せられつゝ、更に次のように言及して居られる。³⁾

品種については赤米の史的考察、赤米の地理的分布、方言名、粃痕の実測、遺跡の状況を通して、南方種もあつたと考え、又水稻のみでなく、陸稻があつたのではないかと考えた。

又南島には先史時代以来耨耕が行われたと考えられるが、水田耕作に於いては、先史時代の状況は不明であるが、家畜に跳ませる原始的な耕作法があり、薩南諸島から大隅半島に及び、年代的にも極めて近代に至つていたことを明らかにした。こうした特殊な技術を伴つた南方系稲作を「島型稲作」として「内地型稲作」に對比して考える必要があることを考えた。又我が本土の先史時代に出現する南方系小型馬は或いは島型の農耕に關係をもつたものではないかと注意した。

尚南島には重要な栽培植物として、里芋、粟、麦等があるが、少くとも里芋、粟は南方語の中に明確に結びつくようであるから、この食習が黒潮水域に於いて関連をもつて拡がっていると考えられ、島型稲作をも含めて、一連の南方系農耕文化の存在を推定せしめるものがあるとした。

稲作に於ける南方との連関は稲米の方言の上からも、農耕儀礼の上からも南方との連関は考えられることを指摘した。

さて右に掲げた国分氏の結論を概観するに日本古代の稲作は、直接的には朝鮮半島西南地方を經由しているが、それは、元来、シナ大陸東南沿岸地方から、漸次、北上してその地——朝鮮半島西南地方——へ齎らされたものであり、従つて日本の稲作は南方的色彩を濃厚に帯びているのであると説いて居られるように思はれる。

こゝにおいて筆者は、主たる課題ともいふべき我が国への稲伝来の経路について重点的に批判を加え、従つて国分氏がわが国の稲作が南方稲作的要素を数々含んでいることを説明せんがために列挙せられた諸事項、例えば、品

種、南方系稲作技術、里芋・粟等の栽培植物、および言語学的解釈、農耕儀礼等については、必要の場合以外、しばらく触れないでおく心算である。というのは、あくまで稲伝来の支配的経路を捉えたいと思つたからに他ならぬ。

二

日本古代の稲が、直接的には朝鮮半島西南地方から移入されたという説を立てるためには、先づ、その地における古代あるいは先史時代の稲作が、日本のそれに先だつて行はれていたことを明かにしなければならぬ。そしてまた、日本古代稲作が南方的であることを説くためには同時に朝鮮半島西南地方における稲作もまた南方的であつたことを立証する必要があると思う。なお、支那大陸東南沿岸地方から、朝鮮半島西南地方に至る稲作伝播の経緯を科学的に実証する必要のあることは申すまでもない。

本項においては、先づ、朝鮮半島古代における稲作状況に検討を加え、日本におけるそれと如何様に関係づけ得られるかを考える。

これに先だつて、国分氏の所説を左に掲げるであらう。⁽⁴⁾

稲作は中国本土では前漢に至つてその都長安を中心とする陝西地方に盛行し、後漢にかけて灌漑政策が著しく発展して中央政府によつて稲作奨励が行われた故に、稲に対する社会的嗜好が向上し、その社会的進出を見たのは後漢以降であらうとする岡崎文夫氏の所説に従つて、横山氏（筆者註、横山将三郎氏）は稲作の半島移入を遅くとも楽浪郡設置頃と見て差支えないとするのである。然しながら日本に於ける弥生式の最も古式の遠賀川式土器

に靺鞨を伴うことを考えると、朝鮮に於いても楽浪郡治を通じての漢人による移入に先立つて稲作が始まつていたと考えてよいと思うものである。

既に秦末漢初の中国全土の大動乱のために、燕趙等より朝鮮に來投するものがあったことを考えても稲作の傳來される機会は早くあつたと思うのである。

恐らく西鮮にはいつた稲は中国東南沿海を北上したものがもたらされたものでなからうか。

日本における稲作移入の一つのコースは西南鮮にはいつたものが南鮮から北九州に間もなく及んだものと考えられるものである。

安藤広太郎博士は我が国への稲の傳來コースとして江南地方海岸より東して対馬海流によつて我が北九州或いは南鮮に來ることは支那大陸と間の最短距離であり、他の経路に比べると危険も少く集团的移住が行われ得るから最も重要であるとされるが、私は博士のこの説が、江南から一直線に、支那海を横断してくるものとするなら、それはやゝ困難なコースと思わざるを得ない。遣唐使の場合を考えても、はじめは海峡を横断して朝鮮半島の沿岸を北上して渤海湾に出ている。支那海を横断して楊子江岸に上陸する南路をとるに至つたのは新羅との關係が悪化して沿岸コースをとれなくなつたからであつて、航海術の幼稚な時代、危険は前者に比して遙かに大きかつたわけである。(中略)

縄文期の終末期に南鮮から渡來者があつたとすると、稲作傳來の可能性が想定される。弥生式時代の開始とも稲作が急に始まつたことを思うとこの想定は不当ではなからう。

次に渡來が海峡を越えてなされたことを考えると、渡來者は単なる農耕活者と見ることは出来ないと思う。

恐らくは海に關係深い生活を一面に於いてもつていたと考えられるのではなからうか。その生活型として、私は半農半漁の型を想定するものである。

それにしてもそのような移動が容易でないことを思うと、移動を促す上の強力な刺戟があつたはずだと思われる。そしてそれには動乱による政治的社会的不安の如きが作用したという事情は考えられないものであるうか。さて、右の所説は大凡次のように要約することが出来ると思う。

一、横山将三郎氏が朝鮮半島への稲作移入の時期を遅くとも漢の樂浪郡設置頃と見得るとされた所論を一步前進せしめ、最古の弥生式である遠賀川式土器に稲の粃痕を伴うからには、朝鮮に於ける稲作は漢人の移入以前から行はれていたと見てよい。

秦末漢初の動乱の際、燕趙の人民が朝鮮に來投しているから、その際、彼等によつて稲作が伝來される機会があつた。

二、西鮮の稲作は、中国東南沿岸を北上した稲作民によつてもたらされたらしい。

三、日本の稲作は西南朝鮮に入つたものが、南朝鮮を経由して移入された。

四、弥生式初頭から稲作が行われており、縄文末期に南朝鮮から渡來者があつたとすば、彼等によつて稲作が伝來されたとする可能性を生じるが、渡來者達は半農半漁の經濟生活を営んでいたと思はれる。

五、民族の移動は強力な刺戟によつて促されると思はれるが、それは動乱による政治的社会的不安の如きものが動機となつたのではないか。

以下、順を追つて管見を披瀝する。

一、国分氏が横山氏の所説に立脚して論を進めて居られる以上、先づ、横山氏が、何故に楽浪郡治時代頃朝鮮に稲作がもたらされたと結論するに至られたかを検討しなければならぬ。横山氏によれば⁽⁵⁾、「西鮮の史前遺跡に於ける第二型土器⁽⁶⁾は概して厚手粗笨であつて紋様もまた稚拙、単純である。その型態に於ても變化に乏しく、多くの打製石器を伴ふのが、通例である。第一型土器⁽⁶⁾に就いても大体同様のことが云へるようである。然るに石器時代末に接近すると各々その固有性に向つて顕著な發展を遂げるのである。即ち第二型土器では漢江河畔の岩寺里遺跡に見る如き石綿、滑石等を混入する成坏術の進歩、洗練された工芸意匠の出現(図略)等があり、第一型土器には組合式牛角把手の發達(図略)、抉入石斧(図略)、結紐状石器の如き特殊石器の伴出、靱の存在などを見るのである。此等の發展は恐らく兩型土器が高度の發達をした漢文化との接觸の結果であらうと思はれるが、然しそこには古代漢文化の標識たる鬲形土器(袋形の三脚を有する鼎の祖形)の朝鮮に於ける欠如が一つの謎となつてゐる。」而して、鬲形土器が發見されない事実を次のように理由づけて居られる⁽⁷⁾。即ち「支那本国に於ける戦亂の度毎に朝鮮半島の地に平和の天地を求めて移住し来る者次第に多く、殊に秦末漢初の支那全土の大動亂のために燕趙等より朝鮮に來投する民は無量数万と言はれてゐる。都市生活に慣れ政治的訓練を受けた是等半島移住者は大同江畔の準平原地に集結し、その夥しい増加は自ら統治を要求せられ、茲に新しい政治生活が営まれるようになる。燕人衛滿が王險(今の平壤)に都して王となつたといふ史記、漢書等の記事は此の事例と考へることが出来るであらう。

斯くの如き半島亡命者の政治生活が漢武帝の楽浪郡設置の素地となり、又原因ともなつたのである。(中略)

漢文化の半島浸潤、漢民族の移住植民に就いては私の論題とする範圍以外に亘るからこれ以上述べることは差控えるが、漢人が西鮮原住民と生活的交渉を持つに至つたのは秦末漢初で已に鬲形土器の使用を忘れ、青銅器に代つ

て鉄製利器が抬頭しつゝあつた項であろう。美林里(筆者註、平安南道、大同郡、秋乙美面、美林里)岩寺里遺跡の如く扇形土器が欠如し、鉄器が出土するのはそのためであると考へなければならぬ。」

西鮮における扇形土器の欠如を、このように理解することによつて、漢文化の西鮮移植を説述された氏は、更に語をつぎ、⁽⁷⁾「西鮮の第一型土器文化が漢文化の洗札を受けてその生活に重大な変化を生じたことは農耕であつて、就中稻の栽培であろう。私は西鮮丘陵遺跡発見の第一型土器に靱の圧痕を度々検出することが出来る。なお第一型土器文化には第二土器に伴出する石皿、石棒が発見されないのは兩者間の穀物の種類に相違があつたことが想像せられ、少なくともその調理法に差異のあつたことが認められる。」

三国史記の百濟本紀、多婁王六年に『下令国南州郡、始作稻田』とあり、古爾王九年に「令国人開稻田於南沢」とあるが、之をそのまま史実と認めることは出来ないけれども、何等かの伝誦を後世になつて記録に留め追記したものと見れば之は水稲に就いて云へるもので最初は陸稲であつたものかも知れない。尤も支那本国では稲は既に周代に存したが前漢に至つてその都長安を中心とする陝西地方に稲作が盛行し、後漢にかけて灌漑政策が著しく發展して中央政府によつて稲作奨励が行はれた。故に稲に対する社会的嗜好が向上し、その社会的進出を見たのは後漢以降であると説かれてゐる。(岡崎文夫氏、支那古代の稻米稲作考)若しそうだとすれば稲作が朝鮮に伝へられたのは遅くとも樂浪郡設置頃と見て差支えない。南鮮では西歴一世紀頃稲が在存したことを金海貝塚によつて証明されている」と結んで居られる。

さて、右に掲げた横山氏の所説に対し、筆者は次のような疑問に当面せざるを得ないのである。

先づ第一に、紋様稚拙単純で変化に乏しく、打製石器を使用していた石器時代人が、高度の文化を有つた漢民族と

接触した場合、果して後者の文化を摂取し得たであろうか。しかも後者は都市生活に馴れ政治的訓練を身につけた当時の所謂文化人である燕・趙からの移住民である。また、古代漢文化の特徴ともいうべき鬲形土器を欠いている理由として、移住民等が鬲形土器の使用を忘れ、青銅器をも使用せず既に鉄器使用の段階にあつた秦末漢初の漢民族等であつたと解釈して居られるが如何なものであろうか。

更に、第一土器・第二土器ともに漢文化の洗礼を受けているのに、何故に、前者のみが稲作と関係を有するに至つたのであろうか。これは単に食生活の相異という解釈―たとい、第二土器に石皿・石棒を伴出するのに、第一土器には伴出しないという考古学的事実があるにせよ―だけでは済まされまい。

管見は凡そ次の通りである。非常に生活水準の高い民族と低い民族とが接触した場合、そこに文化の交流ということが果してうまく行はれるかどうか。そこに見られるものは、政治的或は経済的支配であつて、人道的平等な文化交流など一寸想像もつかないのでは無いか。特に、古く溯れば溯る程、このような傾向が強く、若し、支配被支配の関係から逃げようと欲した場合、地域的に奥地へ奥地へと移動せざるを得なかつたのではないか。このような考え方が許容されるならば、先の第一土器及び第二土器を製作使用していた原住民等は、土器発達の技術面から見て所謂文化人であつた漢民族等により、何らかの形において支配―強弱があるであろうが―されたと見てよい。何となれば、両者共に漢文化の影響を受けているからである。こゝで問題は西鮮の原住民が、(A) 農耕を行つていた場合と、(B) それを行つていなかつた場合とに分れると思う。というのは、横山氏も既に述べて居られるように、自然地理的に見た場合、西鮮は南鮮に比し、遙かに農業的に―特に稲作―価値が低いと考えられるからである。⁽⁸⁾

また、移住者の側からみても、彼等所謂文化人が単に、(イ) 少数の奴隸的従者を随えて移住した場合と、(ロ) 多く

の農民を率いて移住した場合とに分れると思う。理屈としては、結局、(A)(イ)、(A)(ロ)、(B)(イ)、(B)(ロ)の四つの組合せが出来上る。今、これらを簡単ながら説明すると次のような結果になる。

(A)(イ)の場合。原住民が農耕を営んでいても、石器時代のことであつて、到底、余剰生産物などある筈はない。移住民は計画的の移住であるから、充分な穀物を始め他の食糧を携行していると一応考えられようが、開墾というものは決して容易な事業ではない。永年都市生活に馴れた移住民が開墾に従事しないとすれば、勢い原住民を強力に支配し、彼等を使役して開墾しなければならぬ訳であるが、原住民の勞働力にも限度がある。僅かばかりの開墾では多数の移住民を養うことは出来ない。携行食糧を食い潰す可能性が大である。たゞい開墾に成功はしても、原住民に稲作を行はしめることは殆んど不可能に近い。というのは元來祖法墨守的傾向の強い農民のことである。古く溯る程この傾向は強いが、余程の兇作・飢饉に見舞れないかぎり粟稗作を続けたに違いないと思う。しかも稲作の方が、西鮮の場合、遙かに危険をはらんでいることを思うとき、原住民が粟稗作を捨て、稲作に転向するなど到底考えられない。

(A)(ロ)の場合。原住民に関する条件は前と略々同じである。たゞ移住民が多くの農民を随伴している点が異なる。こゝでも計画移住であるから、全人員に対する充分な食糧が携行されたものとする。この場合、充分な食糧と農業勞働力を持つていのであるから、何処へでも定住出来そうなものであるが、農耕先住者(原住民)が聚落している地域こそ最も農耕に適しているのが一般であつて、矢張り、その近接地へ住み着いたと仮定しよう。早速開墾に従事し所期の目的を果したとしても、播種は陸稻でなければ困難を伴う。陸稻でさえ粟稗高粱等のように簡単に栽培出来ない土地柄である。粟稗作を営んでいた原住民が、果して稲作を真似たであらうか。大いに疑問無きを得

ない。移住民が原住民を支配し、稲作を強制した場合に於いてさえ、前述、(A)(イ)のような困難に当面するの
に、稲作を自然に学ばせることは、長年にわたる稲の豊作続きを考慮しないかぎりむづかしい。しかし、原住民を
支配し、且つ、租税的な意味で稲作を強行させることは或は可能であろう。原住民にとつて、それは一部の耕地を
稲栽培に当てさえすれば、事が済むからである。

(B)(イ)の場合。非農耕民を如何に強力に支配したとしても、全く農耕を知らぬものにそれを強いることは、彼
等を死え駆りたてることであり、全く不可能である。というのは、開墾は直接食糧を得ることの出来ない長い月日
を要する仕事であつて、日々の食糧を必要とする漁獵民にとつて開墾への使役は餓死を意味するからである。原住
民等は彼等 avoiding 奥地へ移動するに違いない。

(B)(ロ)の場合。移住民は農民を随伴し開墾に成功したとしても、非農耕民を農耕民化することは甚だ困難であ
る。漁獵民は元來、獲物の多い地域に住むのが一般であつて、所謂その日活しを行い、長期計画など振り向きもし
ないであろう。又、彼等が居住していた地域が遇々農耕に適し、移住民が稲作を行つて生活を営んで見せても、恐
らく、それを学ぼうという魅力を原住民に与えないのではないか。

このように考えて見ると(A)(ロ)に可能性が見出されるのであるが、それならば、燕・趙等の移住民の故郷に於
いて稲作が行はれていたのであるか。横山氏は岡崎文夫氏の論文(前掲)を引用して居られるが、支那で稲作が
行はれたのは、前漢代の「長安を中心とする陝西地方」であつて、北支那全般にわたるものでは決して無い。特
に、燕・趙はそれぞれ河北省の北部と遼寧省、河北省の西部と山西省に国したといわれているが、両者共に稲とは
関係が無いようである。それとも西歴紀元前三世紀末頃これらの地方における稲作の記録があるのであるか。寡

聞の筆者は未だこれを耳にしたことがない。また横山氏は、前漢代に長安を中心とした陝西地方に稲作が行はれたとする岡崎氏の説を前提として、おそくとも楽浪郡設置頃西鮮に稲作が行はれたと見て居られるのであるが、どうであろうか。岡崎氏の説は良いとしても、その利用の仕方に難があると思う。というのは、武帝は随分版図を拡張し各所に植民地を設定してはいるが、楽浪などは、その中の僅かな一部に過ぎない。その楽浪にわざ／＼当時陝西地方だけに行はれたという稲作を——原住民は稲について何も知らない——強行させたであろうか。植民地の役人等は固より本国の生活様式を望んだであろうが、このような場合、本国から直接運送するのが寧ろ一般であると思う。全然、稲作を行っていない原住民に作物転換をやらせたり、本国の稲作農民を移住させるまでもあるまい。尚、当時、稲米は北支那に関するかぎり、他穀よりも高価であつたので、租税として原住民に稲を作らせるといふことも一応考えられようが、これとて技術的に教え込むのは面倒であり、武帝程、武力・政治力のある人物ならば、こんな小細工を試みるより、寧ろ、中・南支那・印度支那半島の稲作民から直接運上させたいと思うが、如何なるものであろう。

序でながら、横山氏は三国史記・百濟本紀より二ヶ所引用して居られるが、その解釈の仕方については兎も角、これらを西鮮に入れてよいものかどうか疑はしい、南鮮らしい感じがしてならないのである。「国南の州郡」であるとか「南沢」であるとか、兩者ともに南という字が用いられているからである。

又、逆戻りになるが、第一土器——は扁形土器——古代漢文化の標識——を伴はないが、稲籾の圧痕のある土器を出土している。それにしても、漢様式の農具(扶入ノミ形石器については、金屬製手斧を石で模倣したとの解釈を下て居られるが)——耕作・收穫・調整等——を出土していないのは如何なる理由によるのであろうか。若し、稲が支那

から西鮮に齎らされたものであるならば、少なくとも、何か稲作と関係ある農具が伴出しそうなものであると思ふのである。

さて、愈々、国分氏の説を批判すべきときになつたが、右に述べたように、管見によれば、横山氏の説はどうにも理解困難である。換言すれば、納得出来ないのであつた。従つて、国分氏が、秦末漢初の動乱の際に燕・趙からの移住民等が稲作を伝来する機会があつたとせられる説にも亦同様賛同することは出来ない。

また、わが国最古の弥生式である遠賀川式土器に稲粃の圧痕を伴っているから、朝鮮における稲作は漢人移入以前から行はれていたと見てよい、と論じて居られるが、如何にも理解し難い。民俗学的には兎も角、歴史的に一体どのような根拠があるのであろうか。朝鮮から日本に稲が移入されたという確たる証拠があれば兎に角、若し、判きりした根拠が無い場合、何故、日本に先だつて朝鮮に稲作が行はれていなければならぬのか、大いに判断に苦しむのである。朝鮮における最も古い稲関係の遺物は現在のところ慶尚南道・金海貝塚から発見された米粒塊——鶏卵大——であるが、それとて、その年代は大体西暦一二世紀頃に推定すべきであるとされている。一体、わが国出土の稲関係遺物は総て金海出土のものより年代的に新しいのであろうか。否、新しくなければならぬのである。若し臆測が許されるならば、恐らく、国分氏は現に行はれている通説——端的に言へば俗説——即ち、稲は熱帯植物であるから何処からか移入されたものでなければならぬという言葉に捉はれ過ぎて居られるのではあるまいか。われ／＼はこのような立場を否定する。あくまで実証的に学んで行きたいと思ふからである。

二、西鮮の稲作は中国東南沿岸を北上した稲作人によつてもたらされた、というのであるが、これは恐らく、安藤広太郎博士が北支那への稲の伝播経路として「また他の経路は時代は後れているかもしれないが、宇野博士（筆者¹⁰）

註、宇野内空博士）の説いている西暦紀元数百年前の時代に南支の海岸より北支の海岸部を占めていたモンクメール族などが南支より楊子江以南の江南、浙江地方に稲作を伝へて更に江北、北支に及ぼしたのであると思はれたことに賛意を表されたのかと思うが、筆者には安藤博士説そのものがすでに理解出来ない。博士はモンクメール族などが直接北支にまで稲作を伝えたかのように解釈して居られるようであるが、博士がこの結論を出す為に引用せられた宇野博士の説を再引用すると次の通りである。⁽¹¹⁾

それでは南支那の稲作の起原は如何なる民族によつて支那人に伝へたのであろうか。それは紀元前数百年の時代に南支那海岸部を占め支那人や苗族とも接触したことが不可能でないと見られるモンクメール人若しくはオーストロアジア系民族であろう。この民族はその居住地はともかくベンガル湾沿岸まで全体に亘つて稲作の風習を持ち、これらを民族生活の固有の様式としていたので殊にその東部及中部印度に於ける同族ムンダでは支那人の江南浸入より約千年前に既に稲作がかなりの程度まで進んでいたのであるから、このモンクメール人が南方から稲を齎して直接支那人に伝へたか或は苗族の間に先づ取入れられて後さらに漢人がこれを伝承し發展させたといふのは民族学的に極めて至当な想定であろう。

安藤博士は或は宇野博士の論文を多少自己流に解釈せられたような気配がある。（宇野博士の書き方も誤解を招き易いと思う）というのは、この場合は、単に南支那における稲作の起原についての宇野博士の意見であつて、北支那の稲作にまでは及んでいないと思はれるからである。たまたま、モンクメール人が紀元前数百年の時代に南支那から北支那の海岸に住み、全部が稲作の風習を持ち、これを固有の生活様式としていたという言葉があるので、誤解を招いたのでは無いかと思う。安藤博士の解釈も無理からぬものとは思ふが、若し紀元前数百年の時代に北支那の海岸地帯に

モンクメル人が居住し、漢人に稲作を伝えていたとするならば、周代末には、河北・山東あたりこそ北支稲作の中心地域であつてよい筈である。しかるに春秋の学者董仲舒はその時代の国策を論ずるに當つて麦作のみについて説いて居り、⁽¹²⁾ 呂氏春秋の月令は五穀として、麻・麦・稷・黍・豆を挙げ、⁽¹³⁾ 礼記・月令漢書・食貨志等も亦同様であつて凡て稲については不問に附している。たゞ周礼の職方氏は各地に産する所の穀物につき次のように述べている。⁽¹³⁾

楊州其穀宜_レ稻、荊州其穀宜_レ稻、予州其稻穀宜_三五種_一、青州其穀宜_三稻麥_一、兗州其穀宜_三四種_一、雍州其穀宜_三黍稷_一、幽州其穀宜_三五種_一、冀州其穀宜_三五種_一、并州其穀宜_三五種_一、

今これを松本洪氏の解釈のもとに箇条書に直すと左のようになる。⁽¹⁴⁾

楊州（江蘇、安徽、江西、浙江）稻

荊州（湖北、湖南及四川ノ東部）稻

予州（河南及湖北ノ北部）五種

青州（山東、河北ノ東海岸）稻・麥

兗州（山東、河北、河南ノ各一部）四種

雍州（陝西、甘肅）黍・稷

幽州（河北、奉天）三種

冀州（山西ノ南）五種

并州（山西、河北ノ北部）五種

右について、松本氏は⁽¹⁴⁾「三種四種五種ハ鄭玄（後漢末ノ人、西紀一七〇頃）ハ之ニ注シテ黍稷稻、黍稷菽麥稻ト曰ヘ

日本稻の起原について（鈔方）

ドモ、確証ノ徴スベキナシ。幽州ハ今ノ南満州ヲ含ミ、大小豆ノ産出特ニ饒シ。然ルニ独り黍稷稻ノ三種ニ宜シト為シ他州亦タ麻苧ヲ数フル者ナシ。而シテ諸州稻ヲ産セザル者唯雍州ノミト為セルハ、悉ク従フベカラズト雖モ、亦以テ各地ノ土宜ノ異リ有ルヲ知ルニ足ルベシ」と述べて居られるが、若し、右に掲げた各州がカッコ内に記した現在名と完全に一致しているならば、青州即ち山東・河北の東海岸に稻作が行はれていたことになる。しかし、雍州即ち陝西―甘肅地方のみが稻と無関係であるということは、先に掲げた岡崎博士説と全く反対であり、また、松本氏も指摘して居られるように幽州に豆を欠き稻を加えてあることも理解し難い。

さて、青州はその穀稻麦に宜しということが事実であるとすれば、紀元前数百年代にモンクメル人が北支海岸地帯で稻作を漢人に伝えたという安藤博士説にとつて恰好の資料となるようであるが、右述のように雍州・幽州等に疑義があり、加之、周礼が一般に言はれているように紀元前一一二〇年頃の成立であるならば、年代的にモンクメル人―紀元前数百年―とは無関係であると言はざるを得ない。

如上のような疑義があるので、モンクメル人がたとい民族生活の固有の様式として稻作を行つていたとはいへ、今直ちに彼等が漢人に稻作を伝えたとする説を肯定するわけにはいかない。更に、モンクメル人の居住地域に眼を移した場合、彼等は凡て海岸線に沿つていたのであつて、寧ろ漁民的性格の方が強いのではなかつたかとさえ思はれる。一步を譲つて彼等が稻作民族であるとしても、南支と北支とは気候的に極めて大なる相異があるのであり、幼稚な技術を身につけた彼等が北支において稻作を行い得たかどうか疑問無きを得ない。自然を克服することは人類経済生活の一特質ではあるが、古代人の生活は寧ろ自然に順応することにあつたのではないか。若しそうであるならば、稻作にとり不都合の多い北支でモンクメル人が紀元前数百年代において稻作を行つていたとは常識的にも

考え難い。なお、民族学に暗い筆者がこのようなことを言うのは、無恥を暴路するに等しいが、モンクメル人が印度ベンガル湾から支那大陸沿岸全域にかけて居住していたこと、および、それが紀元前数百年前の時代であつたことの確証があるのであるか。どうも雲を掴むようで筆者には判らない。右のような理由で筆者はモンクメル人が北支那への稲の伝来者であつたとする説に賛意を表することは出来ない。

同様に、中国東南沿岸を北上した稲作民によつて、西鮮の稲作が齎らされたとする国分氏の意見にも賛同するわけにはいかない。

三 日本の稲作は西南朝鮮に入つたものが、南朝鮮を經由して移入されたとする説であるが、二の場合、西鮮であつたものが、此度は西南朝鮮となつて居り、何故に南の字を加えられたのか、いさゝか気がかりである。前述のように筆者は西鮮への稲乃至稲作の移入を、それが漢人—秦末代の燕・趙、漢・武帝代の楽浪郡設置—の場合においても、モンクメル人の場合同様認め難いという結論に到達したのであるが、国分氏は西南鮮については一言も触れて居られないからである。どこまでが西鮮であり、どこからが西南鮮であるか、それは凡そ常識に訴へるべき性質のものであろうが、しかし、西南鮮に入つた稲作が南鮮を經由して日本に移入されたという場合、西鮮から南鮮を經由して云々、というのとは読んだ感じが稍々異なる。臆測することが許されるならば、国分氏は別に注意深く両者を区別せられなかつたのではなかつたかと思はれる。いづれにしても、氏はモンクメル人—判きり指摘しては居られないが、中国東南部海岸から北上した稲作民から伝えられたことを考慮して居られる以上、恐らくモンクメル人であろう—からの移入を指して居られることゝ思うが、若しそうであるならば、既に二において述べた通り、筆者の採るところでは無い。同時に、南鮮における稲作も移入されるべき源泉を失うことになり、南鮮を經由して稲

作が日本に移入されたということも批判の必要が無くなるわけである。

四、弥生式初頭から稲作が行はれていたことは、既に考古学的事実であり、今更、間然するところはない。また、縄文末期という言葉はとも角、縄文土器の時代に南朝鮮から渡来者があつたということも亦、同様、考古学的事実である。従つて、彼等によつて稲作が伝来されたとする可能性が想定されようが、しかし、可能性はあくまで可能性であつて、歴史的事実ではない。国分氏は「弥生式時代の開始とともに稲作が急に始まつたことを思うところ想定は不当ではなからう」と述べて居られるが、この考え方は既に多くの考古学者によつて唱えられているところであり、今では最早俗説に近い。曾て、筆者は「本邦古代の稲に関する二三の問題」と題し、それを稲の北方由来説と名づけて批判した。その折、弥生式文化は農耕技術を将来したが、特に稲乃至稲作技術を齎したもので無いという立場をとつたのであるが、それは、朝鮮半島における稲関係の文献―支那史籍を含む―および考古学的遺物を検討した結果、日本のそれより古いものが見出せないからであつた。尚、国分氏は「稲作の伝来とは単に技術の伝来を意味するものとは考えられない。技術の伝習ということが、容易なことでないことを思うと、稲作技術をもつた生活者が渡来したと考えるのが最も自然であると思われる。」

古墳時代以後、移住者が集団的に渡来し、それぞれの專業に従事したことは知られているが、それに類似した移住が―規模は小さくとも―縄紋式文化期に於いてあつたのではないかと思うものである。云いかえるなら稲作の如き有力な農作技術をもつ相当量の移住者を受け入れる事によつて、縄紋文化時代の終末がきたといつてよいと考えられるものである。」と述べて居られるが、氏の立場―稲は熱帯植物であるから、日本の稲は必ず何処からか移入されたものでなければならぬ―を考慮した場合、何故に「稲作の伝来とは単に技術の伝来を意味するものとは考えられ

ない。技術の伝習ということが、容易なことでないことを思うと、稲作技術をもつた生活者が渡来したと考えるのが最も自然であると思われる」などということを強調しなければならぬか、理解に苦しまざるを得ない。なんとすれば、稲が日本に原生していたという立場を採つた場合にこそ、技術の伝来という問題が起るのであつて、この立場を採らないかぎり、技術のみの伝来など―稲種を伴はない―全く問題として提起するに値しないからである。また、「稲作技術をもつた生活者が渡来した」ということも、わざ／＼特記する必要はあるまい。こゝで生活者とは恐らく、稲を常食としている人々を指して居られるのであろうと思うが、稲を常食としている人々が稲作技術をもつて居るのは寧ろ当然であつて、日本に原生の稲が無かつた場合、稲作技術をもつた渡来者が同時に播種すべき―食糧に充てない稲―稲穀を携帯しなかつたら、日本に於いて稲作が行はれる筈はないではないか。

更に、たとい規模は小さくとも、集団的に渡来した稲作技術をもつた生活者を想定して居られるが、―それは古墳時代以後、移住者が集団的に渡来したことを前提として居られるから、恐らく、弓月君の百二十県（日本書記は百二十県、古事記は百二十七県）や、阿智使主の十七県を指して居られるかと思う―縄文末期頃、果してそんな計画的且つ集団的移住が考え得られるのであろうか。それとも考古学的にそのようなことが実証されているのであろうか。⁽¹⁷⁾

尚、渡来者達は半農半漁の経済生活を営んでいたとあるが、これは当然のことであろう。純粹の農耕民が舟を所_有している筈はあるまいし、また舟がなければ海を越えて渡来する筈も無い。

五、民族移動が動乱による政治的社会的不安等によつて行はれたことは、歴史的にも言えることではあるが、これと稲作伝来とを結びつけることはどうであらうか。氏の立場―規模は小さくとも集団的に渡来した―としては、このように考えた方が便利であらうとは思ふが、その根拠があまりにも薄弱である。集団的に移住するためには、

動乱等を考慮するのが一番手取り早いし、同時に計画的移住という面も判きり出て来るかと思う。そして、計画的移住であるならば、十分な食糧は勿論、日常生活に差支え無い程の什器をも携行したに異いない。若し、彼等が稲作民であつた場合、稲作のため農具―調整具をも含めて―、常食糧である稲(粃を含むのは勿論)を携帯することは当然であろう。

しかし、実際は今のところ石器時代において南鮮から集団移住が行はれたという想定は、考古学的には先づ不可能である。結局、筆者としては同氏の説に賛成することは出来ない。

三

以上、国分氏の所論の一部を中心として批判を試みたのであるが、不当な点が多々あつたことと思う。しかし、孰れの研究も足が地についていない感じを受けるのは何故であろうか。矢張り、稲は熱帯植物であるから、日本の稲は他地方から移入された筈である、という先験的命題に捉はれ過ぎていゝのでは無からうか。われ／＼は、このような命題は一応お預けにして、各々の専門に従い、行きづまる処まで地道に研究すべきであろうと思う。(未完)

註(1) 国分直一氏「我が国古代稲作の系統」・農林省・水産講習所研究報告・人文科学篇・第一号・昭和三十年九月。尚、右の論文は、京大文学部教授・柴田実氏の御教示・御厚意によつて拝見することが出来た。本稿を借りて深基の謝意を表する次第である。

(2) 右論文・一七頁

(3) 同論文・四八頁―四九頁

(4) 同論文・三一頁―三三頁

- (5) 人類学・先史学講座・九。朝鮮の史前土器研究。IV、西鮮土器・文化
 (6) 同右、II、二類型と三地方差。

朝鮮史前遺跡発見の土器はそれを形式的に類別すれば四種になることは既に藤田教授の指摘せられたところである。(藤田亮策氏・朝鮮古代文化「岩波講座日本歴史」、同・朝鮮の石器時代「ドルメン第四卷第六号」即ち第一は弥生式に似た半島土器の祖形、第二は所謂櫛目紋土器、第三は彩色土器の一分派とも考へられる丹塗磨研土器、第四は新羅焼土器の原始形である。此の分類は今日の学界に於て一般に認容せられているところである。

併し文化主体といふ観点から考察する時には之を二つの類型に綜括し得ると思ふ。第一型は弥生式に似通へる土器、第二型は所謂櫛目紋土器である。形式分類による第三、第四は第一型に所屬し、第四の原始新羅焼土器が出現すると共に櫛目紋は史前遺跡からその姿を没するやうであつて、遂に第一型のみとなるように思はれる。

- (7) 同書、IV、西鮮土器・文化

横山将三郎氏「朝鮮の史前土器研究」II二類型と三地方差、人類学・先史学講座・九

- (8) 北鮮とは感鏡南北朝道地方を指示するのであつて氣候は乾燥、寒冷でバイカル湖地方に類似するといふことである。地勢は一带に高峻で僅かに狭い海岸地帯に丘陵地があるが、その沿岸地方も寒流のため夏季に濃霧が多く暑気も穏かであるけれども農作物が殆ど出来ない。火山岩地帯は大森林である。然し豆満江流域の内陸地方はさうでもない。

西鮮の地勢は一般に丘陵地であるのが特徴である。大陸性海洋氣候で雨量が少く空気は乾燥し透明である。殊に冬は週期的に大陸から寒冷な季節風が襲来する。急峻な傾斜の所謂西高東低の気圧配置となれば西部海岸は強風が吹き捲くる。而して季節風が卓越する間は寒気と乾燥とが甚しい。それが七日を週期とするから三寒四温と呼ばれてゐる。然し夏季は雨期であつて雨車軸を流すといふ形容そのままの驟雨的豪雨となり、内地に余り見ない現象である。忽にして河川は氾濫し洪水の災害が惹起する。けれども内地に見る如き台風による被害は稀である。

然るに南鮮、殊に南部海岸地帯は対馬海流のため冬季の気温が他に比して著しく高く、且つ多量の降水を有し、雨期は内地と同様に梅雨であつて夏は台風の影響がある。それで南鮮は北九州と同一地域と考えてよいと思ふのである。たゞ南鮮内陸が夏季に全鮮一番の高温地域であるのは農作物に関係が深い。そこで南鮮は内鮮文化の關係に就いては最も重要な役割を演ずるけれども、朝鮮の史前土器文化の個性を論ずるに當つては之をネグレクトして差支ないと思ふ。

日本稲の起原について(鐔方)

日本稲の起原について（鑄方）

二二

(9) 我が国では同時代—西歴一二世紀—のものは勿論、西紀前一二世紀と推定されているものも相当数出土している。

(10) 安藤広太郎博士・「日本古代稲作史雑考」一、稲の伝来

(11) 前掲、「日本古代稲作史雑考」一、稲の伝来、の中に宇野円空博士「マライシヤに於ける稲米儀礼」、第三章、稲作の起原と伝播、より引用してあるものに拠る。

(12) 岡崎文夫博士「支那古代の稲米稲作考」史学地理学論叢（小川博士還暦記念）

(13) 日本米穀協会「支那ニ於ケル義倉及社倉・四民生活・耕地制度・穀物ノ名称ノ研究」・第四編・穀物名称ノ研究、第一章・総論より引用、

(14) 前掲書の実質的な著者、元、農林省囑託、米穀局外地課勤務、

(15) 「我が国古代稲作の系統」三二頁

(16) 拙稿「本邦古代の稲に関する二三の問題、—第十六卷・第四号、昭和十五年十二月、

(17) 同氏は、考古学的背景として次のように述べて居られる。「小林行雄氏が『もちろん今日では弥生式文化のごとくが新しい移住者のみの手によつて経営されたというような考え方は成立する可能性が乏しいが、弥生式文化の興起するために、その主導者として縄紋式民族とは異つた移住者のある程度の量を想定することまでも否定されたわけではない。』

（日本考古学概説八七頁）といわれているのは重要な発言であると思うのである。」国分直一氏「我が国古代稲作の系統」

三二頁